

アクティブラーニング

動き出す学校と先生たちの実践レポート

AL型授業への挑戦

高大接続改革の動向に多くの関心が集まる中、「アクティブ・ラーニング」という言葉がブームのように拡散。今夏、各地で開催された多くのシンポジウム等でも取り上げられていました。この連載では、生徒の主体的・能動的な学びを促すアクティブラーニング型授業（以下AL型授業）を、学校組織として取り組んでいる実践をご紹介します。今回は、キャリア教育の一環としてもAL型授業を導入している秋田県立花輪高校です。

企画協力／小林昭文(産業能率大学 教授) 取材・文／長島佳子 撮影／坂本孝也



第3回 花輪高校(秋田・県立)

School Data

1926年創立／全日制普通科／生徒数427人(男子208人、女子219人)／進路状況(2014年度実績)大学54人、短大14人、専修・その他45人、就職30人



京 久夫校長(中)

民間企業勤務等を経て、1987年に能代高校で教員生活をスタート。2012年花輪高校の教頭を務めた後、県の教育機関勤務を経て、2015年より現職。

赤坂俊彦先生(左)

民間企業勤務後、1995年に新潟県で教員キャリアスタート。1998年から秋田県の教員として、担任、学年主任を経て、2011年花輪高校赴任。2012年より進路指導主事を務める。理科(物理)担当。

久慈隆正先生(右)

1992年に教員キャリアスタート。県内の複数の高校で担任、前任校で理数科主任、学年主任を経て、2013年花輪高校赴任。その年より教務主任を務める。数学担当。

授業参加への意欲が向上
学力との着実な結びつけへ

「授業の中でできるキャリア教育」と、「学力向上への授業改善」として推進

花輪高校のAL型授業は、教務主任で数学科の久慈先生個人の取り組みから始まった。折しも、進路指導部の赤坂先生は、秋田県教育委員会の「キャリア教育実践モデル校(2012年度〜)」の事業実践方法として、外部講師を呼ぶなどイベント的なやり方だけでなく、継続的に実践できる方法を検討していた。

「久慈先生の授業を見ていて、AL型授業は『授業の中でできるキャリア教育』だと感じ、3年めのテーマの柱としました(赤坂先生)」。そして、2014年度より、教務部、進路指導部、研修部の3部が連携し

てAL型授業導入を推進することとなり、同年4月、産業能率大学の小林昭文先生を招聘し、全教員対象のAL型授業の研修会を行った。「小林先生の授業を受けた生徒たちに『おもしろい!こういう授業をやってほしい』と言われました(久慈先生)」

「今まで見てきた研究授業は、すばらしいけれど特殊すぎて真似できないものがほとんどでした。しかし、小林先生の授業は『これなら自分にもできそう』、『今まで自分は教えずにばっかりでした』(赤坂先生)」。しかし、実際にやってみると、教えすぎないことや、グループワーク中の介入の仕方の難しさを実感し、試行錯誤の日々だという。それでも導入し

花輪高校のアクティブラーニング型授業への取り組みの歩み

花輪高校のAL型授業導入の発端は、久慈先生が小誌等の教育情報誌から情報を得て、2013年度の中盤から個人的に数学の授業で取り組み出したことだ。そこでの効果を受け、前校長が「みんなでやろう」と方針を決めたことで2014年度から全校での取り組みへと進化した。また、2012年度から秋田県教育委員会の「キャリア教育実践モデル校」の指定を受けており、その3年めにあたる2014年度の取り組みの柱としてAL型授業を「授業の中のキャリア教育」と位置づけた。同年4月に小林昭文先生により全教員対象の研修を行い、全校での取り組みが本格スタートした。



AL型授業の目的を生徒に意識させるため、基本方針や授業での活動などが書かれたポスターが、全教室に貼ってある。

て1年半、居眠りをする生徒が激減し、授業中にじっくり考えているという生徒が急増、センター試験の自己採点の平均点が昨年よりも21点上がるなどの効果が見えている。「学力ではまだバラつきがあるため、各先生の授業デザインの改善など、今年度はAL型授業を確実に学力に結びつけることを目標に、取り組みを続けています(京校長)」

教員12年
おうしゅうや
奥蒔屋景子先生

英語(2学年)

公民科で教員免許を取得したが、2002年に臨時で英語科教師としてスタート。英語のおもしろさに目覚め、英語科の免許も取得し、2006年から英語教員に。県内の複数の高校を経て2013年花輪高校に赴任。教員としてのモットーは「正直」。



授業と授業外での勉強が結びつくことで真の「学び」に

奥蒔屋先生の授業はとてもテンポよく進んでいく。まず、前回のリフレクシオンシートを配布し、CDを使って全員で単語の復習をする。1分間で暗記したあと、隣の生徒とペアを組んで起立させ、お互いに覚えたかを確認し合い、できたペアは着席する。生徒たちは早く座りたいため、いい緊張感と集中が生まれる。

次にワークシートを配布。全員で音読したあとに、ワークシートを個別に解き、再びペアになってお互いの解

よい授業だけでは学力向上まで結びつかないため、家庭学習を自主的にしたくなる授業が目標

答をチェック。さらに別の設問については、3、4人のグループに分かれて解答を導き出し、班の代表が自分たちの答えを板書する。

「授業中に生徒が主体的に動くことはもともと心がけていましたので、学校がA型授業を導入した際も目的は変わらないと思えました。ただ、グループ活動を嫌がる生徒もいるのでは、という懸念がありました」

実際、日頃から大人しく、当初グループワークで言葉を発せられない生徒もいた。その生徒には、まずは奥蒔屋先生が話しかけたそう。

「私と会話しているのを見た他の生徒たちが『この子ちゃんと話せて、おもしろい意見ももってるんだ』と気づいて、その子に意見を求めるようになってきました。それが本人の自信にもつながっていったようです」

もうひとつの懸念はA型授業と学力との接続だ。

「たとえよい授業をしても、授業だけでは成績は上がりません。今は復習の音読シートと予習用のプリント



教員14年
山口正明先生

数学(2学年)

2002年に講師として教壇に立ち、2010年秋田県立雄物川高校の教員に。2014年4月花輪高校赴任。教員としてのモットーは「教えすぎないこと。問いを投げかけたときに、生徒自身の中で解決できることを期待しています」。



数学が苦手な生徒でも「考える」ことをあきらめずに取り組める設計をしています！

「できない」思い込みから「解けた！」の自信へ

数学は演習で問題を解こうとするときに、どうしてもひとりだけで考えて黙りがちになる。大人しい生徒が多いクラスでグループワークをいかに活性化させるかが現在の課題という山口先生。

「本来はもっとワイワイと生徒同士で動いたり、教えに行ったりする雰囲気があるのですが、まだそこまでいけないので、グループワークの際にどのように声がけするかなどを悩みながら検討しています」

この日の授業は三角関数の不等式。プリントに書かれた3問のうち、例題

グループワークでは時間を意識させるように声がけをして回る。

先に解けた生徒は他の生徒に教えることで、自分の考えがさらに深まる。



小林昭文先生からの アクティブラーニング型授業への アドバイス



産業能率大学 経営学部教授
小林昭文先生

1952年生まれ。空手のプロを経て、埼玉の県立高校教員として25年間勤務したのち、定年退職、2014年より現職。河合塾 教育研究開発機構 研究員も兼任。教員時代にカウンセリング、コーチング、アクションラーニング、メンタリングなどを学び、最終勤務校では物理のAL型授業を実現。現在もその研究と実践、啓発活動に取り組む。

AL型授業を始めてから、保健室の 来訪生徒が減少している学校

今回ご紹介した花輪高校は、AL型授業を推進している中核となる現場の先生方と、トップである校長が導入に熱心であるという両輪がうまく機動しています。昨年の4月と今年の4月に研修でうかがい、今年は先生方のAL型授業の実践を拝見しました。先生方が自らの取り組みを振り返り、向上させようとしている姿勢そのものがALです。

AL型授業を導入して以来、同校では居眠りをする生徒だけでなく、保健室を利用する生徒が減っているデータがあります（※2012年度は612人だったのが、AL型授業を導入した2013年度は458人、2014年度は403人。毎年最も来室者が増える5月について、今年は例年の約1/3にまで減少）。因果関係は断定できませんが、他校でもAL型授業を組織的に取り組んだことで、保健室の来室者数と不登校者数が減少した例がありました。

同校ではベテランの先生が非常勤講師も含めた新任の先生をうまく指導されており、今後のAL型授業の広がりにも期待しています。



小林先生の名著、全国の新進気鋭32名のAL型授業のレポート、『現場ですぐに使える アクティブラーニング実践』（産業能率大学出版部・2000円税別）も是非参考にしてほしい。



起立して単語の確認。集中して単語を覚える生徒たち。



「Help each other please」など、英語で学び合いを促す奥野屋先生。

を渡して、家庭学習と授業のサイクルがうまく回っていますが、生徒が自ら学ぶようになる为本当の『学び』になると思います」

AL型授業の効果では、演習型の活動があることで、前半で行う単語を覚える吸収力が違ってきたという。

「授業の後半の文章作成で使おうと思っただけ覚えるのと、ただ丸暗記するのでは食いつきが違いますね」

現在は、英語科での問題解決型演習のバターンを模索中だ。

「他校の取り組みや本を参考にしたリ、研修に行ったり、英語科の同僚と情報交換するなど、授業の幅を広げていきたいと思っています」

の1問を先生が説明し、残りの2問をまずは個人で考え、その後グループでの学び合いで解き方を考える。確かに恥ずかしそうにして、声を出せていないグループもあった。

「いつも同じ座席で近くの生徒とグループを組ませているので、離れた席の生徒と組むなど、クラスの特徴によって組み合わせや進め方も変えたほうがいいかと考えています」

それでもAL型授業による手応えは着実に感じているという。

「人に教える効果なのか、もともと数学が得意な生徒の成績が上がっています。また、『グループワークなしで1時間ずっとひとり考えて授業の

日は苦しい』という生徒の声もあり、仲間と学び合うことで授業への意欲が高まっているようです」

また、数学が苦手な生徒の特性として「自分が解ける問題と解けない問題の見極めができていない」ことがあり、その解決にもAL型授業が役立つと山口先生は考えている。

「苦手な生徒は、考える前に『できない』と思ってしまうのです。でも実は公式は覚えているのに、解く過程が面倒だったり自信がなくて途中であきらめてしまっただけですね。AL型授業なら演習に時間をかけるので『できるはずだからやってみて』と声をかけることもできて、仲間から教えてもらいなから解答が導けると『解けた！』という自信につながります。時間がたってもそれを再生できれば学力の向上につながるのですが、知識を定着させるためには授業時間以外に自主的な家庭学習が必要です。それとどう結びつけるかが今後の課題です」

